

# 大島塾新聞

ムロノキ  
新聞社

第10号

広告



## 五島列島釣行記

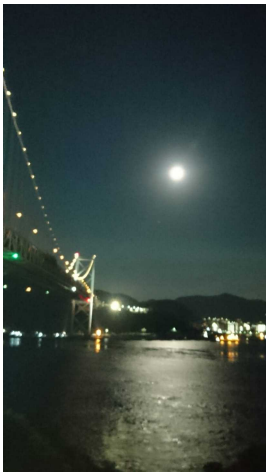
二〇一七年春の五島釣行記  
平成二十九年六月十日(土)  
大潮・干潮十五時、満潮二十一時

六島の猫たちにいたづらられ屈辱的敗北を喫しながら、前回釣行記では主役を演じた作村は諸般の事情により欠席。今回の新顔はまだ二十代の矢羽君(以後Pと称す。なぜかは次回Pが登場したときに明らかにする予定)で、一年前からフカセ釣りを始めたばかり。「四〇オーバーのチヌを二匹釣ったら五島に連れてってあげる」と約束したら、いともあっさり条件をクリアした。好青年であるがチヌが簡単に釣れたものだからフカセ釣りを若干なめている感がある。はたして五島の海がどのように彼を迎えたか、お楽しみ。

メンバーは直邦さん、向根、ユージ、コージと我々の六名。土曜日の天気予報は午後から雨、多少の気の重たさはあるがなにせ筆者は最近予定していた釣りが天候などのせいできごとく中止になり、今回はほぼ半年ぶりの釣行。はやる心でビビットカラーの新車シエンタに荷物を詰め込み、向根とともに六月九日(金)いつもより一時間も早い午後七時に自宅を出発した。壇ノ浦のSAで休憩。運転は向根にまかせてあるので、酒のつまみを調達しようと思ったら売店が改装中で閉まっていた。辺りを見渡すと見事な満月が海峡を照らしている。真鯛は明るい月夜によく釣れるというのが通説で、事実我々も月が昇ったとたん立て続けに良型真鯛を手にしたことを幾度も経験している。「これが明日だったらなあ」と関門橋にかかる満月を見あげて向根がつぶやいた。

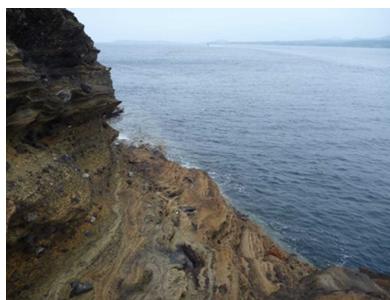
.....\*.....\*

ばらもんの仮眠所ではいつになく直邦さんが饒舌であった。最近は歳のせいか以前程の意欲を感じられなくなっていたのだが、今回はかなり前から「俺は墓の下にあがって尾長を釣る」と気迫のこもった宣言をしていた。なにかあったのか? 深い詮索は怪我のもと、追求はせずスルーした。直前に島原近辺で発生した「震度4」の地震のことなどひとしきり談義して入眠、目覚めると薄日の差すおだやかな朝だった。早くも七時半には渡船に乗り込んだ。佐世保湾に停泊している大型の巡洋艦に、思わず手を合わせ世界の平和を祈りながら上五島六島を目指した。



壇ノ浦 名月

風の海を一時間余り、ユージとコージが希望していたケムタ瀬には先客がいたため上礁できず、最初に直邦さん、向根組を墓の下、筆者とPを千畳敷に降ろして船は消えていった。残る二人は六島北礁の通称「ホテル」に上礁。



六島ホテルの釣り座。沖は宇久島。

我々の千畳敷は大潮の満潮時間だったが少し足下が洗われるくらいで、すぐに釣りを始めることができた。この時期にしてはタカバの数が少なくフカセには時折三〇センチまでの尾長がヒットしてきた。今回の筆者の目的の一つがアカハタ、前にユージに頂戴し帰宅後の宴会をおおいに盛り上げてくれた魚である。一〇センチのジグヘッドにテンヤ用のエビをつけて足下に落とすとたちまちアタリがあった。餌を付け替えた二投目、四〇センチの見事なアカハタ、

立て続けに同型を追加した。こんなにくまなく今日ほとんどなんことなるのかと思っていたらその後はアタリがあつてもなかなか針に乗らず、もう一尾追加したところで飽きてしまいましたグレを狙うことにした。



開始直後の良型アカハタ

P2はワームでやはりぼつりぼつりと小ハタやアラカブを釣り上げていた。

その後の転機はタマツメ、筆者が三〇オバーの尾長を何匹か釣っているのと左に立っていたP2に大きなアタリ。足下への突っ込みになすすべもなくラインブレイク。上げ潮の時間帯中ずつとあて潮になっており、なぜかP2にだけ繰り返して来た。チヌとは全く違う引きにP2は繰り返して何度も何度もラインを切られ、茫然自失。結局筆者に大きなアタリは一度も訪れることなく、そのままタマツメが終わった。

五島の洗礼をP2がどう受け止めたか？ 思えば筆者ももう二十年近く前、初めての五島で同じような経験をしていた。P2がこの壁を乗り越えて大きく成長してくれることを心から祈る。



P2の釣果

私たちがそうこうしていると、夕方になってユージとコージが「六島ホテル」をチェックアウトして我々の千畳敷に合流してきた。コージは二〇歳のアラカブ一匹、ユージはそれより小さなアカハタ一匹、二人ともしよげかえっていた。ユージは「ヒラマサと思われるアタリが二度あり、一度目は痛恨のラインブレイク、二度目はルアーのフックを伸ばされてしまい釣り上げることができなかった」と悔しげな様子。コージの方はほんとにそのアラカブのみ。夜の



千畳敷ではカゴ釣りを始めたものの真鯛や尾長のアタリはなく、夜九時から予報よりも少し遅れて雨が降り始めた。まもなく彼らは全てを放棄し、あきらめの体(てい)で寝袋にもぐり込んだ。この雨を想定して筆者は「屋根」つきの千畳敷を選んだのだが、雨に濡れなかつただけがこの時点では彼らの唯一の救いだっただろう。

筆者もぼつぼつ寝るかと思いつつながら焼酎を飲んでみると、墓場のねずみ男ではなく墓の下の向根から電話がかかってきた。昼間こそめぼしい釣果がなかったが、夕方からの直邦さん良型尾長をかなりの数釣り上げ上機嫌、夜十一時を過ぎても雨の中まだカゴを投げ続けているという。七十歳に近づこうという長老を何がそうさせるのか？ 一方向根にもそこそこアタリはあるがなぜか口太グレばかりだったという。この時期の口太グレの食味については後述する。今回の不幸はそんな向根に降りかかる。夜半から降り始めた雨は徐々に強さを増し風も加わってきた。

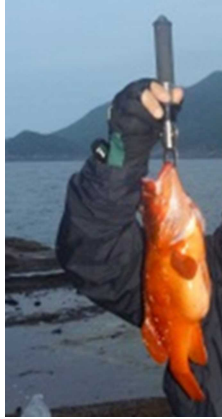
この二人は以前から釣り場にテントを持ち込むのが常で、今回の雨にも対応できるはずだった。直邦さんのテントはちよつと高価なメーカー品で防水能力が優れている。一方向根のはちよつと安いやつで不安がある。このため彼はブルーシートで防水補強を試みていたのだが、強さを増す風雨にシートをひっぺがされ、ぼとぼと落ちてくる雨水に目を覚ましたのが深夜二時。知らぬ間にテントの中は水浸しになっていて、わずかに水が溜まっていなくて、そこに体育座りをして「さむい」とつぶやきながらじつと一夜を明かした。マツチ売りの少女にやさしく声をかけたら向根の顔で振り向いた、そんな夢を見そうな話であった。今回の負のヒーローはまちがいないこの男である。



雨中の仮設住宅手：前直邦、奥向根



逆転の2ランHR!



ユージ悪夢からの解放

雨は翌朝にはすっかりあがっており、五時に目覚めるともう陽が差しそうなおだやかな朝に一変していた。筆者はまだアカハタ以外にめぼしい釣果を得ておらず、グレ釣りの準備をしていると他の三人も「ユージ、ユージはこの期に及んでまだ「アラカブー」、「小ハター」。以前向根が「六島ペラ一男」の大敗北を喫したことが頭をよぎる。まさかその再現か。その窮地から一足先に抜け出したのはユージだった。満面の笑顔で四〇サイズのアカハタをぶら下げている。

2年ぶりのフカセ40オーバー



ひとつ釣れると不思議なものでその後は立て続けに良型のハタを釣り上げた。いよいよ追い込まれたユージであるが、千畳敷奥の瀬で黙々とイワシカラーのシンキングペンシルというくねくね腰を振るルアーを投げ続けていた。いつも言うようですけれど、ユージは盲目的でないとやれませんが、心のどこか一部でも「こんなもんで」とか「魚はいるの?」てな気持ちがあったらだめよね。ここからのユージ、なんと六五サイズの真鯛を二尾連続ゲット。九回裏の逆転ツーランホームラン! 歓喜の表情(写真)はどこか広島カープの菊池に似ていると思いませんか? 今回のMVPはユージに決定。筆者は最後の最後におよそ二年ぶりのフカセグレ四〇オーバーを手にして安堵の納竿を迎えた。

さて、釣魚食について。前回の釣行でアカハタの旨さに感激し、現場で内臓とエラを処理して持ち帰るようになった(ただし肝を持ち帰れないことが唯一難点、検討の余地あり)。同じように処理して持ち帰ったあの真鯛の刺身はどうだった? ユージ君。六月の尾長グレは脂が乗って焼き切りの刺身も煮付けもやはりとびきりの美味であった。冬場には脂が乗って美味い口太グレだが、夏場は磯臭く不味である。筆者が最後に釣った四十四サイズの真鯛が最後には釣った四十四サイズの真鯛が美味くないことはわかっていたがせつかくだったので活け締めにしてエラ、内臓、鱗を除去し、しっかりと冷やして持ち帰ってみた。だめ、やっぱりだめ。刺身にしても煮付けにしても、脂も無ければ味もなし。思い余って白味噌、ゴマ油、ネギ、タマネギ、ニンニクと合わせてなめろうにしてみたところ、さすがの夏口太もそこまで手をかけたら美味しくなった。向根も同意見で、彼は最終的に幽庵焼きで食したとのこと。ただ、ここまで手をかけないとおいしく食べられないような魚を知人へのお土産にするのは失礼になるので、今後この時期の口太は自分で食べる分だけ持ち帰り、多く釣れたらリリースし

そうしてひと周り大きくなった口太を秋に収穫、これをもつて大島塾マスターズ訓とするっ!

(編集後記)

佐世保の港に帰るとぼらもんの二階には懐かしくてんぷらとムズビのサービスが復活していた。みんな大好き、特に今回参加できなかった木村の大好物である。秋には一緒にいたであろう。

千畳敷にもやはり猫たちがやってきた。ただその中に老猫志乃ぶの姿はなかった。元ヤンキヤバのさやかと、おそらくその子供たちであろう三匹は体格がまだ小さめだった。そのなかでも一際小柄で餌取り競争にもついていけない写真の一匹。よく見るとまだあどけなくかわいい顔をしている。できたらならグレンことなく真っ直ぐに成長してもらいたいものである。この猫を「みほちゃん」と名付けてしばらく見守っていくことにする。ところで直邦さん、なんであんなに元気だったのですか? (福)



みほちゃん

# Gallery



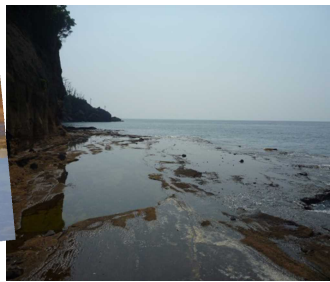
初日の千畳敷、おもな釣果



贅沢なアカハタのいけす



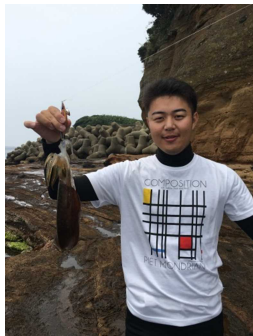
雨上がりの千畳敷、朝は快晴に



千畳敷東側

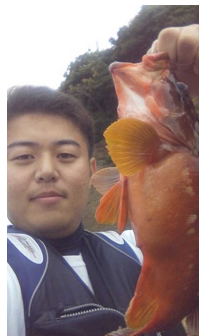


ユージ2匹目の真鯛(雌)



P2 とアオリイカ

唯一のアコウ(小)。  
前に出しすぎ!



世界が平和でありますように



復活っ! バラモン名物てんぷら

## 今回の墓の下



上げ下げと無関係に左からの  
当て潮のことが多かった

船着き

向根: 肘痛のため遠投  
できず20mくらいでロ  
フト主体。

引くと干上がるゴロタ

六島 墓の下

直邦さん: 4~50mのやや遠  
投。ウキ下10mで尾長多数。  
茶グレ混じり。



意外に釣った向根

